

あゝ 何うすればいいのでせう

——あなた あの人が死なないと思ふ？  
から云つて妻は悶えた

『何うして俺にそれがわからう』

俺は冷やかに答へた

自分自身でさへか

自分の身がどんなになるのかわからない身ではないか

何うして人のことがわからう

俺は思ひ出した

俺自身 幾度か幾度か死を思つたことを

もう斯うなつた限りは

生きて居ても

ろくなことが起らうとは思はれぬ

力と生命とを失つた生だ

凡ゆる意味に於いて 凋落の影を追うに過ぎぬ

望みがなく 光が消えた生だ  
こんな風に考へたことを

俺はまた思ひ出した

死んだ野村の追悼會のあつたとき  
壁にかゝげた彼の寫真と

——君の雄々しい闘ひを

新聞で見て涙にむせんだ

俺はいま

夫吹岬の尖端に来て

太平洋の怒濤と咆哮とをきゝながら

永遠の革命を思つて居る

俺はいま

一切を放擲して突進する

苦しい準備に夢中になつて居る——

と云つた彼の絶筆とに見入つて

——あゝそれは

去年の九月十八日であつた

そして 俺の事件の起つたのは



今年のちやうどその頃だつた

では 來年は？

來年のその頃は？

その頃まで

俺のいのちがまだ此の世に

生き残つて居ればいゝが……

と思つたことを

追悼會に集つた友人達に

このはなしを俺はした

——お前はまさか

野村のやうなことは

しないだらうなあ

と友人達が心配して呉れたからだ

——そんなことは知れたものでない——

と俺は答へた

するとそのとき 友人の一人が

——もしそんなことをするなら



俺達は葬式にも出ないぞ――

と警告した

友人達が

ほんたうに俺のことを思つて呉れて居るのを

俺は心情の底で感じた

心のうちでは泣きながら

――いゝよ 死んだものは死んだものに葬らせよ――

と俺は昂然として答へた

死んで捨てられ怒られることは

俺にとつて何でもない

けれど 死ぬことの餘りに弱い自分を

俺は耻ぢる

何よりもいけないことは

後に残される小さな子達の不幸を

彼等への父の責任を 愛を

忘れることの赦されぬ罪だ

どんなに苦しくても俺は生きる



生きねばならぬ

だがそれにしても

生きることの苦しさ

死ぬことの苦しさ

あゝ 何れがより大なる苦しきならう

——彼は死んでも

俺は死なない

死なない——

俺はかう妻に云つた

——あゝ 何うしてこんな不幸が……

あなた 何うすればいいのです

何うすればいいのです

教へて下さい

教へて下さい——

妻は俺の膝の上に泣きくずほれた



俺はたゞ 彼女を愛撫してやつた  
それよりほかに 何が出来よう  
不幸なる女よ  
不幸なる俺よ

『彼はお前を

俺の懷から奪ふことによつて  
彼の所有に歸することによつて

お前を救ふのだと云つて居るではないか』

俺はかう云つた

けれど俺は

彼がお前を救ひ得るものだとは

心のうちのどんな隅でも信じては居なかつた

俺は耻ぢた

俺自身の言葉に耻ぢた



小さな憤りが

俺の愛を殺して居たことに気がついて耻ぢた

——たとひそれが

ほんの一瞬間のことであつたとは云へ



あゝ哀れなる理性よ

理性は俺に

まことの幸福の何であるかを教へ

妻には

まことの愛の何であるかを 教へはするが

さて 欲望と煩惱との力が

理性にまして どんなに強いことよ

煩惱に反逆する理性よ しかも

何と云ふ弱さだ

讚美せよ

欲望の威力を



ほめたへへよ

煩惱の支配力を

理性よ

おとなしく奴隷になれ



早く 来て下さい

狂亂する此の男のところへ来て下さい

毎日のやうに

かうした手紙をかゝせた煩惱は

つひに彼を 彼自身を

ふら／＼と妻のもとへ近よせた

あゝ それは雨のどしやぶる寒い日だつた

蒼ざめた幽霊のやうな顔をして 彼は

俺の家の開けつ放された門の外に立つて居たのだ

魔力にひきつけられるやうに

妻はひきつけられて行つた



悲しみに疲れはて、

晝寝して居た俺のそばに

與志坊は泣いて走つて來た

何ごともしらず

俺は彼を ふとんの中に入れてやつた

『あゝ、可哀い兒／＼』

かう云つて手足を撫でてやると

すや／＼と彼は眠つて行つた

哲坊の泣き聲が彼方にきこえる  
やがてまた 彼が來て

『マ、が……行つてしまつた』  
と泣き叫ぶ

『マ、が何うしたのだ？』

『マ、が……』

くやしさを言葉もわからぬ  
はつと思つて俺は起き上つた

『マ、をつれに來たのです……』

『もう歸らないのでないかしら……』

こんな言葉が俺の耳に響く

『マ、は歸ります』

きつと歸ります』

確信をもつて俺は語つた

確信？

おゝ何と云ふ儂ない確信だ

俺はたゞ

今日は歸ると確信したゞけなのだ

俺は哲坊に云つた

『マ、をもうやりませう』

マ、は この家がいやになつたのだ』

哲坊は泣いた

寂しく 悲しく 恨めしく

『哲ちゃんは寂しいの？』



答への代りに

哲坊は 身體をもだえて泣いた

『寂しいのはお前ばかりではないのだ  
與つちやんも バ、も同じなのだ』

俺の眼からは涙が落ちた

俺は 彼女の去つた後のことを考へた

あゝ、そして何と云ふ寂しさだ

やるせない 苦しい胸よ

子供達のことを思ふと

せつ角 歸つて來た幸福に

心ゆくばかり甘へて居た子達から

再びまた奪はれてゆく母の愛を考へると

あゝ、何と云ふ哀れさだ

小さい子達よ

やつてはならぬ

子達のためにやつてはならぬ

俺はかう決心した

だが

それでも尙去らうとするときには？

俺はもう その想像だけで

怒りが胸のうちに燃えた

俺は決心した

もし何うしても彼女が去らうとするなら

先づ 俺と子達とを  
殺させよう と

俺は 書き置きを認めた

『俺は俺自身の自我の尊嚴のために

お前の欲望を満足せしむる前に

俺の生命を

お前に奪はせよう

お前が俺を殺さねばならぬやうに



俺は仕向けよう そして

抵抗なしに俺はお前の

刃に斃れよう

お前の罪を

お前自身によつて罰せしむるために』

俺は此の遺書を

原稿紙の間にかくしておいた

俺は 短刀を手に入れようと考へた

二日の間

決心は動かなかつた

けれど 二日目の夜

妻が ほんたうに苦しんで居るのを見て

俺の決心は挫けた

それほど彼を慕つて居るのなら

俺にかうした権利はない

俺はから思つた

『彼のところへ行き度いなら  
行くがい』

俺は 不幸を忍ぼう』

俺は遺書を見せた

見せてすぐ破いてしまつた

妻は泣いてくく泣きくづほれた

『わたし ほんたうに彼が

死ぬのを知つたのです』

妻はから云つた

再び俺の心はその言葉で迷つた

妻は ほんたうに彼を

愛して居るのではない

すまないと云ふ心と

欲望との混淆が

その苦しみの凡てだ

では 何うして妻を



放し得ようぞ



だが 何が煩惱に勝つことを得よう  
妻は到頭 心をきめた

『何うしてお前を放されよう』  
俺はぶる／＼とふるえながら止めた  
妻は思ひとどまつた

理性はさゝやく

去るものは去らしめよ

止まつて居て何の幸福があらう

生活を新にせよ

新らしい幸福を得よ

感情は渦捲く

かたく握つて放すな

子たちのため

彼女自身の幸福のため

彼の眞の幸福のため

そして自分自身の愛の實現のため

妻は思ひとどまつた

俺の心には

寂しさが残つた

彼から手紙が來た

三通一度に妻の手に

妻がそれを讀みはじめたとき

彼の姿が幽靈のやうに現はれた

妻はもう耐えられなかつた

彼女は去らうとした

哲坊が彼女にしがみついた

『マ、をやつてはならぬ

彼が哲ちゃんのマ、を



とりに来たのだ』

俺は前後も忘れて叫んだ

あゝ何と云ふ狂態だ

しかも

感情は こぼれて行つた

もうこそ最後だと 俺は思つた

二ヶ月の間の地獄よ

今こそ 俺は

お前から釋き放たれた

おゝ 妻よ

別れよう

別れて他人とならう

—— おゝ だが何うして他人になられよう

精神的にも 物質的にも

こんななまでに結ばれた二つの人格が

おゝ 何うして他人になられよう

だが 他人にならねばならぬ——  
別れねばならぬ

愛するものよ

色々の點で

お前を満足させ得なかつたことを

俺はすまなく思ふ

一切を お前の

不運と諦らめて呉れ

幸福であれ

幸福の日は

お前を祝福するやうに……

お互に過去を忘れよう

將來に幸福を築かう

さらば 妻よ

断ちきれない此の絆を断たう

悩みく



お前は今 與志坊を抱いて

俺の書齋に眠つて居る

明日は別れゆく二つの肉體だ

二つの自我だ

運命に断たれたきづなを

お前は今宵

お前自身の手で力をかぎりくつつけて居る

その手は離れねばならぬ

何もしらぬ子供の悲しみと寂しみを

お前一人に負うて嘆きつゝ

明日は別れねばならぬ

俺はいま 子供に代つて

『さようならを云はう

さようなら マ、よ

さようなら……

マ、の仕合はせのためなら

仕合はせであつて下さい

さようなら……



さあ 泣かずに別れて下さい  
さようなら マ、よ』

みんなは寝しづまつた

みんなの代りに

俺はさようならを云はう

だが 誰に？

あゝ 誰に？

お前さへが熟睡して居るではないか

俺がいま面と向つて居るのはたゞ

運命の神

眠ることを知らない

人の悲しみや寂しさに氣をとどめない

冷酷な運命の神

あゝ運命よ

俺はお前の奴隷となつた

お前への反逆をやめた

だか覚えて居よ



この刹那こそ

俺がお前を征服したときだ

俺は一切の王だ

新しい天 新しい地

新しい力

新しい人生

それが俺の前にひらけた

新生をはぐみ育てよう

静かに静かに

ふるき運命よ

さようなら

永遠に さようなら

寂しき道づれ

——母を失へる子達へ——



何で母が お前達を去つたのか

お前達は 知らない

たゞ 居なくなつたことゝ

もう 恐らく歸らないであらうと云ふこととだけを

お前達は知つて居る



今までに 母がちよい／＼歸つて來たとき

お前達は喜んだ

甘へた

あまへて 思ふ存分手をかけさせた——母にも父にも 誰彼の區別もなく

お前達の はちされる愛の要求が

まだ／＼ 充されなかつたからだ

充されざる愛の寂しさが

お前達に残された

だが それにしても尙お前達は

母と一緒に居るとき

どんなに幸福であつたらう

表面にあらはれた相が

どんなものであつたらうと

親と子との

神秘的な愛の交感が

どんなにお前達の

素直な魂を養つたであらう



お前達はいま 元氣だ

——たとひお前達の顔に 魂のうちに  
憂鬱の影が色濃く表はれて居ようとも  
子供に與へられた自然の叡智で

お前達は一つのこと

執着はして居られない

新しい欲望と 新しい創意が

お前達の悲しみを忘れせさる

あゝ しかしそれが

どんなに 此の父の心を痛ませるか

お前達の 無心な生活を見るいぢらしさは

お前達の憂愁を見る遣瀬なさより

この父にとつて 何うしてそれが

より軽いものだと云はれよう

父は昨夜

眠られぬ夜を お前達の



寢床の側で仕事をした

あゝ哲郎よ

お前は知るまいが 幾度かお前は  
寝ごとを云つたのだ

そのうちで

はつと父の胸を打つたものがある

お前は悲しげに叫んだ

『行つちやいやあ……』

マ、が お前の家を去らうとするとき

マ、の袖にしがみつき

さながら狂氣した猫のやうに

マ、の顔をひツかささうな格好をして

幾度か／＼お前の繰返した同じ言葉だ

ひる間の 無心な遊戯のうちにも

魂の奥深くに 秘められた心だ

無意識の世界から出るお前の本心だ

私はペンを擱いて お前の寝姿に見入つた



お前はまた すや／＼と眠つて行つた

愛——それがお前達の全生命なのだが  
その愛から去られる懼れ

愛するものから捨てられる憂へ

それがお前の

夢寐の間にも忘れぬ心だつたのだ

まことに愛こそは生命！

愛に不足を感じなかつた時は

私は愛と云ふ言葉を 蔑んだ

けれど お前達と一緒に

愛から離れた私は

あゝ どんなに愛を懐しんで居るか

愛こそは生命の生命

愛なくて生活はないのだ

あゝ 私の愛する子達よ



何と云つて私はお前達に謝らう

いや 言葉なんかで

何うしてお前達に赦しが請はれよう  
母も父も

お前達からは永遠に赦されぬものだ

お前達の生命の生命を

お前達から奪つて行つたのだから

お前達は今

何事にでも驚異を感じる

感じ易い神経のおかげで

お前達の寂しさを紛らせて居よう

けれど 今しばらく経つと

お前達の自意識が目ざめて来る

そして此の お前達に缺けて居るもの

——何よりも本質的に

お前達になくてならぬものから

お前達が離されて居ることを



さとり出すだらう

お前達の人生が 運命的に

かたわものであるのを知るであらう

あゝ その寂しさよ

私自身が それを知つて居る

九つするとき 私は私の母に別れたのだ

母は病苦に悩み／＼此の世を去つた

人々は私を哀れんで呉れた でも

私は左程 悲しみはしなかつた

寂しさが 私の胸を襲つたのは

それから後 おもむろに私が

人生を思ひ味ふことが出来るやうになつてからだ

母を持たない子の悲しみ

寂しさは ひし／＼胸にせまる

ことに 母の愛にひたりきつて居る

友達の幸福を目のあたり見たときなど

あゝ どんなに私は



私の不幸な人生を呪つたことか

いや 今も尙

私は私の人生を

幸福なものだとは感じて居らぬ

だん／＼と お前達も

寂しさを増して行くであらう

私の愛する子達よ!

私は私の人生を経験して来た

お前達が 意識的に人生の寂しさを感じたとき

私のこの言葉を覚えよ

——人生は幸福の香氣に酔ひしれるところではない

人生は涙の谷!

苦惱の山!

喜びの幻!

いや

一切のことは幻にすぎない

幻を幻と感ずるものゝみが



やゝたしかな實在だが  
それとてもやがて消え去り  
滅びゆくものだ  
或る力がお前達に在つて欲求する  
それが事實だ  
欲求だけが實在する  
一切のものは欲求の影だ  
而も その欲求さへも  
やがては衰へ消えて行く

實在にして幻  
幻にして實在——  
おゝ愛するものよ  
欲求せよ  
欲求せよ  
たゞ 欲求に負けるな  
影のごとき欲求の本體を見て  
それに打ち敗られるな  
欲求に

せめてもの喜びを掘るのだ

欲求し 戦ひ 努力する

それが生活だ

それが生活の喜びだ

人生に 何ものかの目的を覓め

それに 到達するのを求むることは

幻を掴まうとするのも同じだ

とは云へ 愛する子達よ

たとひ人生が

涙の谷であらうとも

また 苦惱の山であらうとも

また 寂しさの海であらうとも

それは必ずしも

不幸そのものではない

不幸は打ち勝たるべきものだ

我等の主観と意志と力とによつて打ち勝たるべきものだ



我等の住む社會の組織によつて征服さるべきものだ  
悲しみながらも 幸福であれ  
苦しみながらも 幸福であれ  
寂しみながらも 幸福であれ

◇

お前達に幸福であれと云ふのは  
それは私の 無理な云ひ分かも知らぬ  
お前達の成長と共に

お前達の悲哀が増すからだ

だが 愛するものよ  
たゞ これだけのことは  
覚えて居て呉れ

——お前達の不幸は

お前達ばかりのものではなく  
此の父の不幸でもあり  
母の不幸でもあると云ふことを

七年の間

私達二人は 決して幸福ではなかつたのだ

互に愛し合ひながら

互に憎み合ひさへしたのだ

幸福と 不幸と

喜びと 悲しみと

満足と 不満と

あゝそして どんなに私達は

寂しかつたらう

感激によつて

私達は結婚した

やがて

感激の火に

水がそゝがれた お互に

愛に對して私達は



餘りに強慾すぎた

わがまゝな 愛の強慾！  
充たされぬ 愛の缺乏！

その上

お前達の母は病身だつた  
また

お前達の父は貧しかつた

まことに

お前達の父こそ 眞の無産者

一文のもとでもなく

一文の貯へもなかつた

——今とても同様だが——

父は

お前達と お前達の母とを

支えねばならなかつた

あゝ、そうして

読み度い本も讀めず

觀たい芝居も見得ず

朝から晩まで、どんなに此の父が

いやな仕事をしつゝけて來たらう

そして母は？

新しい私達の生活が始められるまで

労働の何であるかを知らなかつた母は！

貧しい無産者の家庭だ

炊事、裁縫、洗濯、育兒

さうした一切の家政が

纖弱い彼女の任務となつたのだ

もし自我のない二人だつたら

どんな事にも忍べたらう

だが、人一倍自我の強い二人だ



二人は 何うかして此の生活を  
打ちやぶらねばならなかつた

そこに二つの異なる道

二人の岐路

かうした生活の抑壓は

社會組織の變革によらずして

打ちかたれ得ぬものと 父は考へた

父の社會運動がそこに生れた

あゝ だがその運動が

どれ丈けの効果を

私達の家庭に持つて來たか

持つて來たものはたゞ

父にとつては 經濟の重荷

母にとつては 多忙と心勞との惱み

未來への奉仕のために  
父はその重荷に堪えようとした  
けれど母にとつては  
負ひきれぬ重荷だ

家庭の春は過ぎて行つた  
何時の間にか寂しい  
秋の風が家庭に吹き初めた

何と云ふ寂しさだ

その寂しさに悪魔はつけ込むのだ

あゝ、幾度かその魔の手に

父も母もかゝらうとしたか

母はもう耐えられなかつた

前後の考へもなく母は反逆した

たゞ自我の解放のために



だが

世の中の變らぬ限り

何うして眞の解放が得られよう

悩み

苦しみ

悲しみ

残れるものはたゞそれのみだ

父にとつても

母にとつても

お前達にとつても

恐らくお前達の時代には

世の中はもつと變つて居よう

お前達の日はもつと幸福であらう

そのお前達の幸福のために

父と母とは足臺となつたのだ

それにしても愛する子達よ

かう云つて私はお前達への責任を  
廻避しようとするのではない  
私は私の責めを負はう  
そしてひとり  
私の寂しい道を歩まう

けさも 私は

朝起き前の床の中で  
いつもの如く物思ひに沈んで居た

早くから眼をさまして居たお前達は  
いつになく睦まじ氣に話し合つてゐた

あゝその無邪氣な談話よ！  
私はひとり床の中で泣いた

「與つちやん

誰れが一番好き？」



哲郎 お前がそれをきいた

「ババも マ、も

哲ちゃんも 久榮ちゃんも

みんな好き」

與志郎 お前がかう答へた

お前達はなほ話しをつとけた

『與つちちゃんがマ、を

それほど好きなのに

マ、は

何うしてよそに行つてしまうんだらうね』

『何うしてだらうね』

『與つちちゃんが

あんまり泣くからなんだよ』

『泣くからなんだね』

『もう 歸つては来ないよ  
行つてしまつたんだよ』

恐らく悲しさを凝乎と

こらえるためであつたらう

與志坊は黙つてしまつた

バ、に叱られたとき よくやる

あの泣きたさを 耐える

不格好な口をして居たであらうか

それを見る餘裕が私にはなかつた

私は むせび入るやうに獨りで泣いた

マ、が何うしてお前達を

また 此のバ、を

離れて行つたか



いぢらしい お前達の解釋よ

だが 誰がその

ほんたうの理由を知らう

ほんたうのことは

此のバ、にも 恐らくは

マ、自身にさへか

わかりはしないのだ

不幸なる子達よ

寂しさに勝つて呉れ

人生は 獨りぼつちだと云ふことを

ほんたうに悟つて呉れ

そのとき 力が

お前達に湧いて來るだらう

不幸なのは

お前たちばかりでない

バ、も マ、も

同じやうに 不幸なのだ

あゝ バ、は

お前達を哀れむやうに

どんなに お前達のマ、を

哀れむで居ることか

お前達を愛して呉れる一人の小母さんが

バ、に云つて呉れた言葉を

バ、は今 お前達に贈らう

『自分ほど大きな不幸を持つて居るものはないと

自分の小さな胸の中で考へて居る者が

世の中に どの位澤山居るかを

覺えて居て下さい』

さあ

それでは小さいものよ

年を経て 寂しさに襲はれたとき

此の言葉を思ひ出して自らを慰めて呉れ



強くく

人生を生きよう

寂しさ

悲しさ

苦しさ

孤獨

一切を征服しよう

戦闘の情熱のうちに溶けて死なう

それがたゞ一つの生だ

それこそまことの生の相だ

## 愛の復活

たうとう お前は歸つて來た

俺の愛の翼の下に

お前の愛する子達の胸に

俺達みんなの楽しい家庭に

お前自身のほんたうの心に

まことの愛が甦つたのだ

まことの生活がひらけ初めたのだ



見よ 子たちの喜びを  
見よ お前の心の平安を

さながら新婚當時のよろこびのやうに  
俺達は愛の復活によろこぶ  
新らしい生活へのもくろみが  
愛の完成への企てが  
子達の未來への心やりが

俺達二人の間で  
愛の陶酔のうちに  
心と心とで 語り合はれる

これこそお前の眞の住家  
運命のさだめた生活  
幸福の家



最初から

俺は信じて居た

お前が俺と離れおぼせるものではないと

もし俺に信仰と云ふものが残つて居るなら

これこそは 俺の

隠されたかたい信仰だつた

あゝ 唯が此の秘密を知らう

こゝろとこゝろと

霊と霊と

相感應しあつた此の二人を措いて誰が知らう

それにしても 何と云ふ運命の鞭だ

信じながらも俺は悲しむだ

信じながらも俺は苦しむだ

俺はさながら

苦熱に凋んだ草葉のやうに

力といのちとを失つて居た



だが

今となつては却つて

感謝しよう

無心な運命の鞭に感謝しよう

以前に増した愛の復活のために

まことの愛の出生のために

俺達のわがまゝが

結婚生活の倦怠が

新しい慾望への憬れが

餘りに不用意だつた俺の過失が

俺達の離反をもたらしはしたが

さて 眞に別れて見て

どんなにそれが耐へがたい寂しさであるかを

俺達はお互に知つたのだ

俺達の靈と靈との結合は

無條件に

生れながらに定まつて居たものだと言ふことを  
俺たちは今 はつきりと知つたのだ

◇

それ故に

俺はお前を咎めまい

お前の行爲が

どんなに俺の靈を傷けたとは云へ

どんなに耐へがたい悩みを生みつけたとは云へ

また どんなに苦い思ひ出を貯へさしたとは云へ

俺は一切を忘れよう

運命に感謝しよう

生涯とくことの出来ない結合が

俺達の間になり立つて居たのだと言ふことを

お前の行爲によつて

はつきりと悟ることが出来たのだから

あゝ 俺は一切を忘れよう



一切を赦さう

お前も

忘れて呉れ

赦して呉れ

新しい生活を創造しよう

俺達は互に

人生の虚無を知つて居る

けれど

虚無のうちにも歡びのある事を知つて居る

俺達は互に

人生の悲しさ寂しさを經驗して來た

けれど

そのうちにもなほ歡びがあるのを知つて居る



二度お前が彼の許に走つた後で

お前は云つて来た

『たゞに子供たちばかりでなく

あなたと離れて居ることは

此の私には耐え難い寂しさなのです』

俺はほんたうにお前にすまないと思つた

もしあのことが

俺には ほんのちよつとした煩惱だつたが

お前には

あんな悩みと絶望とを與へたあのことが

われ／＼の結婚生活を汚しはしなかつたなら

恐らくはお前も

これほど大膽に 俺の愛を蹂躪しなかつたらうにと

俺の胸は悔恨にうづいた

お前が あんなに頹廢的な氣持ちになつて居たのも

世間の風潮や

俺達の周圍のものゝ空氣の感染はあつたにしても



もし あの事がなかつたなら  
こんなにもなつては居らなかつたらう

かう思つて俺は

ほんたうに自分の弱きを嘆いた  
そして お前の不幸を悲しむだ

お前を こんな悲しさと寂しさとに陥れたのは  
大部分俺の罪だつたのだ

俺はたゞ自分を責めた  
責めて責めて責めとほした

だが 今となつては仕方がない  
たゞ運命のまゝに生きやう  
俺はかう心に決めた

子供が病氣になつた  
俺はそれを お前に知らせた

お前は驚いた

お前は歸りたいと云つて來た

俺はしかし

歸れとは云はなかつた

一つには

どんなに自分の過失を悔いて居ても

お前の俺に與へた苦痛と侮辱とが

今や あまりに大きなものとなつて居たからだ

一つにはまた

たとひお前が歸つて來ても

再びまた同じことを繰り返しかへしたなら

再びまた彼への執着が起つて來たなら

それこそもう

お互の最後の破滅だと感じたからだ

毎晩々々 俺はお前の夢ばかりを見て居た

同じやうにお前もまた



俺と子供との夢を見つゞけて居た

お前は過去の楽しかつた日を思ひ起した

一日ぢゆうその思ひ出で充たされて居たこともあつた

お前は今や俺への愛着の情を

無理にも抑へつけて置くことが出来なくなつた

ある日 たうとうお前は

何の前ぶれもなく ひよっくらと

俺達の家に戻つて来た

俺は當惑した

心のうちには歡喜の情が渦捲きながらも

なほ來るべき不幸の豫想に思ひ惱んだ

『何うしたのだ』

嚴肅なお前の顔を瞞めながら俺は訊いた

『たうと、黙つて歸つて來ました

随分ながい散歩でした』

ひかへ目な微笑をもつてお前は答へた

『ちよつと散歩に』と出かけたまゝ

お前は彼れにつれられて行つたのだつた

俺はなほ迷つて居た

俺はお前を受けいれまいかと思つた

『再びまた

同じ不幸を繰返すのではないか』

俺は訊ねた

『さゝえ

私はもう きつぱりと決心して來ました』

お前は答へた

俺は安心した

俺のうちの愛は

一切を忘れようと決心した

忘れ得ると 俺は感じた



俺はお前を受納れた  
子達ちを われ／＼の側に呼んだ  
幸福な春の光が家庭に充ちた  
子供も お前も 俺も 姪も  
その他一切のものは  
その光りをうけて柔らいだ  
歸つて來た光よ  
歸つて來た幸福よ

打ち碎かれた心で  
柔和な ほんとうに女らしい態度で  
『愛してね』とお前は云つた  
『一切を犠牲にしても……』と俺は答へた  
溢れ出る愛の泉から

だが妻よ 赦してくれ  
それほど愛して居ながらも  
俺はなほ 時々憂愁の雲にとざされた

憤懣の情にさへ襲はれた

俺の憂愁を見てとつたお前は

「赦してね」と熱情をもつて俺を抱擁した

「最初から赦して居る」と

またしても俺には歡喜の涙！

あゝ妻よ

俺はお前を赦す

最初から赦して居る

だが妻よ

そんなに云はれるとき

かへつて俺の胸はいたむ

同じやうに俺はお前に願はねばならぬ

お前も俺を赦して呉れ

俺の一切を赦して呉れ

あゝさうだ

さうしてお互に赦し合つて



われ／＼の新しい生活を始めよう  
新しい愛と幸福との生活を



世間が何と云はうが

あゝ そんなことは何であらう

俺達は俺達を生きる

俺達は貧しい

精神的にも物質的にも  
だが それが何だ  
生活は俺達の愛のうちにある

あゝ 愛するものよ

夢魔の呪ひは拂ひ落さう

愛の貯蔵からわれ／＼の靈を養はう

新しい生活から愛の富を積まう

燃焼し 消えてゆくわれわれの生活に

寂しい歡喜の焰をあげよう  
 悲愴なる人生  
 愛の歡喜のうちに  
 今こそよろこんで  
 われ／＼の生命を捨てよう  
 それが革命の情熱の火であらうと  
 愛の情熱の焰であらうと  
 あゝ 愛するものよ  
 新しい力に生きよう

大正十二年二月廿日印刷  
 大正十二年二月廿日發行

亂舞する

定價金貳圓

不許  
 複製

發行所

著者 加藤 一夫  
 發行者 山本 美  
 印刷者 石川 金太郎

東京市芝罘區愛宕下町一丁目一番地  
 東京市芝罘區西船場町三十七番地

電話 芝罘一八四〇番  
 芝罘二六三〇番  
 芝罘三八三〇番  
 芝罘四三三〇番

改造社

秀英會印刷



賀川 豊彦 著	星より星への通路	六四 版十	上四六判 製	定價 十七圓	送料 七錢
中澤 臨川 著	小説 嵐の前	十五 版	上四六判 製	定價 十五圓	送料 五錢
谷崎 潤一 著	愛すればこそ	五十 版	上四六判 製	定價 十六圓	送料 五錢
中西 伊之助 著	長篇小説 緒土に芽ぐむもの	九 版	上四六判 製	定價 十九圓	送料 三錢
文學博士 厨川 白村 著	近代の戀愛觀	六十 版	上四六判 製	定價 十七圓	送料 七錢
三上 於菟 吉 譯	ソノ傑作 獸人	新 刊	上四六判 製	定價 十八圓	送料 九錢
高瀬 毅 譯	黒人ルネ・マラン傑作 バツアラ	新 刊	上四六判 製	定價 十五圓	送料 五錢
阿部 次郎 著	北郊雜記	十 版	上四六判 製	定價 十五圓	送料 五錢



57  
140



終